Whole Food 人
インタビュー

安武 信吾さん

「はなちゃんのみそ汁」

愛する夫と娘を残してこの世を去った妻のことを綴った「はなちゃんのみそ汁」。テレビドラマにもなり来春には映画が全国で上映される。主人公ともいえる千恵さんはタカコナカムラさんの親交も厚く、本にも登場している。千恵さんの夫であり、父であり、著者である安武信吾さんに、本や映画のこと、タカコナカムラのことなどを伺った。

安武 信吾（やすたけ しんご）
1963年9月11日生まれ。福岡県宮若市出身。下関市立大学を卒業後、西日本放送に入社。久留米総局、奈良支局、運動部、出版部などを経て、現在、編集企画。

安武 はな（やすたけはな）
2003年2月15日生まれ。福岡市出身。「ECO地球家ジュニア大使」、環神社、ガンバ大阪と料理、看板に「はなちゃん12歳の台所」（求の光協会）がある。

取材：喜多ミナミ

タカコナカムラさんが編集長を務める『まるごと』Vol.2（一般社団法人ホールフード協会発行）より転載させて頂きました。

まるごと
No.4266 16-42 4/1

最初は本を書くどころかブログも読めなかった

最初は本にするつもりはありませんでした。だいたい妻のブログも、日記も読めなかった。とても眠い話だったんです。そもそもものきっかけは朝日新聞の記事でしょうか。千恵がくくなって2年ほど経った頃、千恵のブログを読んだ朝日の記者が話を聞きたい、と言ってやってきた。で、何度か話をして、それが記事になったんです。その時の反響がすごくて、テレビの取材までできました。昔から知っている文藝春秋の編集者からも、「千恵さんがはなちゃんに何を伝え、何を遺そうとしたのか。それは安武さんにしか書けない」と言葉化を勧められました。最初は渋っていたんですが、ゆっくりでいいから書いてみればと何度か勧められたので、朝4時に起きて会社行くまでの2時間、書くことにしたんです。それが3ヶ月。すごくよかった。妻と話をしているようで、涙が出たり、思い出に取ったりしてなかなか進まず、結局半年ほどかかったんですが、ようやく書けた。それを優秀な文春の編集者がうまくまとめてくれて、ようやくおこりなりました。

「師めたら駄目」と言ったタカコ先生の言葉

成母がはなと同じ5歳のとき母をなくしているんですが、まったく実の母のことを覚えてないんです。だから、はなのために千恵のことは活字には残したかった。後にはながこの本を読んだ。「ムスメの卒業式までムスメの卒業式まで（中略）ムスメのこどもが産まれてくるまで」と千恵の書いた文章を読んで「ママがかわいそうすぎる」と大泣きしていました。

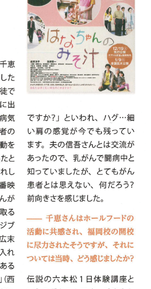
タカコ先生と千恵との出会いのことなども、この本にはけっこう詳しく書きました。それほど千恵にとっては大きな存在でした。僕自身も忘れられないことがあります。千恵がもって3週間と医者に言われたとき、僕は過呼吸になるほど動揺してしまった。なんとか家に帰り、電話したのがタカコ先生でした。そのとき先生が「あきらめたらだめと思う」と言った。その言葉でよし、頑張ろうと思いました。翌日、妻は自宅に戻り、1か月間、本当に素晴らしい時間を持つことができました。

自主上映映画「いただきます」

本にも書いた、はなが通っていた高取保育園のことも映画になります。食育で全国的にも有名な保育園で、子どもたちがご飯を作る、ご飯だけでなく味噌まで作る、そこで育った子どもが素晴らしいんです。「85歳の西園長がお元気なうちに映画にしたい」と「はなちゃんのみそ汁」でメーキングを担当したVIN OOTAさんに話したら、やりましょう、っていうプロデューサーをお願いしますと（笑）。自主制作の映画ですが、来年春には完成します。

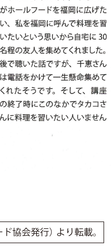
千恵は「食べることは命に繋がっているからないがしろにしたくない」と言っていた。タカコ先生は「ヴィトンのバッグよりサラダマスターの鍋」と言っています（笑）。食べることと、そしてその食べ物を作る台所が基本ということですよね。だから今は双のほとんどを台所に注ぎ込んでいます（笑）。

千恵の49日まで僕は酒浸りだった。そんなとき5歳のはながみそ汁を作ってくれた。それを飲んで僕は初めて笑ったんです。はなはその笑顔をみて「産まれてきてよかった」という感情に包まれたでしょう。そのとき僕は思った、これが千恵の目指した、生きる力を身につけることを言うことかな、と。食べ物を作る、それは技術だけでなく、生きることの喜びに気づかせてくれるんです。



写真提供：クリナップ

『はなちゃんのみそ汁』が映画化され、2016年1月全国上映がはじまります。広末涼子さん演じる妻武千恵さんは、タカコナカムラホールフードスクールの初代福岡校事務局であり、タカコさんを「食の先生」として頼りにしていました。「はなちゃんのみそ汁」でも実名で登場しているタカコさんに映画公開にさきがけ、お話を伺いました。



――試写をご覧になった感想は？

とってもいい映画でした。テレビドラマ版は、悲しいとかかわいそうとか泣かせるドラマに作られていて、少し残念な気持ちが残りました。映画でも号泣しましたが、見終わったあと、前向きになるというか、元気になる映画にしたいというようなこと、幸せな気持ちになりました。

――映画で印象に残ったシーンはありますか？

私、神奈川県でのコンサートのシーンを実際に会場で拝見しました。広末さんがアカペラで、流血星を唱い、信吾さん役の滝藤さんに感謝の気持ちを伝えるシーンがあります。そして信吾さんの親友よういっちゃん役が舞台の場で線帳をあげるシーン。これには涙が止まりませんでした。それは本当のことだからでしょうね。クランクアップの日、福岡からも沢山の千恵さんの友人たちが参加されていました。よういっちゃんも福岡から駆けつけていた。この日、私は千恵さんが会場にいると感じましたね。そして現在福岡校の生徒でもある未次由美さんも映画出演。彼女も千恵さんと同じ病気で頑張っています。がん患者のためにタオル帽子を配る活動をされており、スクリーンに出たときにはまた号泣。それほうれしかったからです。でも、一番映画で泣いたシーンは千恵さんがはなちゃんにベジプロスを取るシーンがあったんです。ベジプロスとはいってないけど、広末さんが野菜の切れ端を綿に入れていた。そのそばに置いてある私の「まるごとしたただきます」（西日本新聞社）のまが2秒くらい映るんですよ――うれしくって、千恵さんを想い出し、もう涙がとまりませんでした。

――千恵さんとはじめて会ったときの印象は？

2007年の秋でした。「あ～、ホンモノのタカコさんだ～～～」と近づいてきて「ハグしていいですか？」といわれ、ハグ…細い肩の感覚が今でも残っています。天の信吾さんとは交流があったので、乳がんで闘病中と知っていましたが、とてもがん患者とは思えない、何だろう？前向きさを感じました。

――千恵さんはホールフードの活動に共感され、福岡校の開校に尽力されたそうですが、それについては当時、どう感じましたか？

伝説の六本松1日体験講座というのがあるんです。千恵さんがホールフードを福岡に広げたい、私を福岡に呼んで料理を習いたいという思いから自宅に30名程の友人を集めてくれました。後で聴いた話ですが、千恵さんは電話をかけて一生懸命集めてくれたそうです。そして、講座の終了時にこのなかでタカコさんに料理を習いたい人いませんかって、生きる気力、誰かの役に立たいという純粋な気持ちを最後まで持ち続けていた千恵さんのメッセージを感じてはしいです。

――「はなちゃん12歳の台所」は、千恵さんと出版するはずだったのですか？

千恵さんは、私と料理本を出したいね～と夢のひとつとして盛り上がっていました。それはけわなかったのですが、その夢を娘のはなちゃんと実現できたのはとってもうれしいです。

――実際、料理を作ってみての感想は？

レシピは、信吾さんが書いたものを私が修正するという感じで～～。でも、どれも安武家らしいものばかりで、ああ、こうしてやるのも美味しいなあと私の方こそ勉強になりました。たとえば、おばあちゃんのちらし寿司の錦肉は、親鳥の方が味があっておいしいとか、おむすびの具は高取保育園の想い出とか…2人が千恵さんこさ後、食を大切に、いやり字に暮らしてきたことがよくわかります。

『まるごと』Vol.2（一般社団法人ホールフード協会発行）より転載。

『はなちゃん12歳の台所』書籍紹介

「12歳のはなちゃんでもこれほどの料理を作ることができるんだ」と、読者のみなさんが料理を作りたくなるきにしたいとはなちゃんは話しています。「おばあちゃんのちらし寿司」「ママが作ってくれたがり玄米」「ふうこうのチャーハン」など、ママからつながるいのちのレシピにおばあちゃんに教えてもらった次武家の味、さらにパパとはなちゃんの暮らしのなかから生まれたレシピが満載。さらに、かつお節と昆布のはなちゃんの基本出汁から、梅干し作りや折り味噌といった保存食まで、写真入りで紹介されています。包丁研ぎまでやっているはなちゃん、えらい！で～、レシピだけでなくがあったかくなるエッセイも掲載されています。日々の暮らしから生まれた12歳の目線で揺かれた家族のあり方に思わず涙してしまいます。

好評発売中
はなちゃん12歳の台所
安武はな 著　タカコナカムラ 監修
定価：本体1,200円＋税